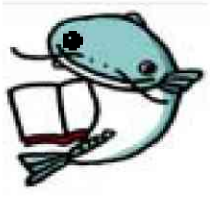

第　９　号

ナマズの知恵袋

平成18（２００６）年7月1日　発行

心に響く歌をたずねて

紫野行き標野行きという有名なフレーズは覚えているけど、これって、誰の、何という歌だったかしら？　今回は、こんなときに役立つ和歌や漢詩などを調べる参考書をご紹介します。

古来より四季や人の心情を詠んだ詩歌が数多くあります。めまぐるしく変化する現代だからこそ、自然を見つめ、昔の歌人たちの「ことば」をゆっくり味わってみませんか。(※書名の後の［］の中は請求記号)

『ことば』から和歌をさがす

『新編和歌の解釈と鑑賞事典』（井上宗雄・武川忠一編，笠間書院，1999 年）［R－9111－イ］

上代から現代にいたる、わが国の代表歌人 335 人をとりあげ、その作品 843 首について鑑賞付で紹介しています。巻末には初句索引、歌人別索引、主要語句・事項索引が付いています。

『通解名歌辞典（改訂増補）』（武田祐吉・土田知雄著，創拓社，1990 年）［R－9111－タ］

万葉集から近代短歌にいたるまで約 3000 首を収録。通解と簡単な解説がついています。索引は収録されている和歌を初句から第五句までのどこからでも検索できるので便利。人名索引もあります。

『新編国歌大観』（第 1～10 巻）（角川書店，1983～1992 年）［R－P080－1～10］

勅撰集から私撰集、私家集、歌学書・物語・日記などで詠まれた約 45 万首の和歌を収録。各巻が歌集と索引の２冊で構成。索引は和歌、歌謡、漢詩句の本文を各句にわけ、どこからでも引けます。

『校注国歌大系（復刻版）』（本巻全 23 巻，索引５巻）（国民図書編，講談社，1976 年）［R－P080－1～28］

万葉集、勅撰集、歌合等から明治初期までの諸歌聖の和歌、長歌、旋頭歌等を収録。和歌の場合は初句および第三句から引くことができます。

『現代短歌分類辞典』（第 1～61 巻）（津端亨編纂，イソラベラ社，現代短歌分類辞典刊行会，現代短歌分類辞典刊行所，1954～1996 年）［２-9111-1～219］

明治･大正･昭和の短歌約 60 万首を収録。歌語の五十音順配列による短歌総索引。

＊＊　七夕を詠む　＊＊

古来より「七夕」は人びとに好んで詠まれています。たとえば、『万葉集索引』で「たなばた」を調べると「織女」、「多奈波多」、「棚幡」、「棚機」などさまざまな表記があり、「織女」を「たなばたつめ」と読むこともあります。

『万葉集』に 133 首ある七夕歌のなかで、多くの歌が牽牛星（彦星）が天の川を船や徒歩で渡るのを詠んでいるのに対し、中国の七夕伝説のように織女星が天の川を渡るのを詠んだ歌もあります。

多奈波多し
舟乗りすらし
まそ鏡
清き月夜に
雲立ち渡る
（大伴家持）

参考文献『万葉ことば辞典』(青木周平ほか編著，大和書房，2001 年[R-P230-ア])
『万葉集索引』(古典索引刊行会編，塙書房，2003 年[R-P210-コ])

滋賀県を題材にした歌もたくさんあります。蒲生野を舞台にした「*あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る*」（額田王 万葉集　巻１・20）をはじめ、「瀬田」「田上」など身近なことばから、「玉野の原」「不知哉（いさや）川」など聞きなれないことばまでを歌枕に、さまざまな歌が詠まれています。このように滋賀県ゆかりの和歌を調べるのには、**『校注歌枕大観　近江篇』（森本茂編著，大学堂書店，1984 年）［SB-9100-84］**がたいへん便利です。記紀歌謡から新古今集の歌人までの和歌・詞書の中から、近江国の歌枕（地名・社寺を含む。国境では隣接国にも及ぶ。）をすべてとりあげ歌枕を解説しています。

歌ことばや歌枕から調べる

『歌ことば歌枕大辞典』（久保田淳・馬場あき子著，角川書店，1999 年）［Ｒ－9111－ク］

古典和歌に現れた語のなかから、歌語、歌枕、歌題だけでなく一般語、複合語も解説しています。

『日本歌語事典』（佐々木幸綱ほか編，大修館書店，1994 年）［Ｒ－9111－サ］

記紀・万葉から現代までの短歌に用いられた語句約１万３千語を見出し語としています。例歌約３万首を収録。作者名と出典が示されており、巻末には歌語索引と歌語逆引き索引が付いています。短歌実作や研究にも活用できます。

『勅撰歌歌枕集成』（全３冊）（吉原栄徳著，おうふう，1994～1995 年）［Ｒ－9111－ヨ］

勅撰２１集と万葉集にでてくる歌枕、歌に読み込まれた地名を調べることができます。歌枕や和歌文学研究のみならず地方史の研究や文学散歩、さらに作歌の手引きとなります。

漢詩を調べる

●**『漢詩名句辞典』（鎌田正・米山寅太郎著，大修館書店，1980 年）［R-9210-カ］**は中国および日本の古今の名詩名句、原詩約９２０首、作者数２８１人（中国１９９人・日本８２人）を主題別に掲載。巻末には**詩句索引、作者別詩題索引、語句索引と索引項目が充実**しています。たとえば耳になじみのある**「春眠暁を覚えず」**ではじまる漢詩を調べてみましょう。作者を知っていれば**「作者別主題索引」**で**「猛浩然」**から引くこともできますが、**「春暁」**というタイトルを知らなければ見つけることができません。どちらも知らない場合は、語句索引で**「春眠」**からでも**「暁を覚えず」**でも引くことができるので便利です。

●**『漢詩の辞典』（松浦友久編，大修館書店，1999 年）［R-9210-マ］**には**「漢詩」に関する情報辞典**という特色があります。「詩人・詩風」については、（中国）先秦～近代、（日本）平安～明治の時代別に、「詩跡」については市・省ごとに解説されており、漢詩の用語・テーマ・形式についても詳しい。**引用訓読漢詩**の**原文**と**出典**、**総合索引**および**作者別の詩題索引**つき。

●**『中国名詩鑑賞辞典』（山田勝美著，角川書店，1979 年）［R-9210-ヤ］**は、歴代中国詩のうちから日本人に古くから親しまれているものを精選し、一般的な注釈を施したものです。たとえば**「国破れて山河あり」「少年老い易く学成り難し」「春宵一刻値千金」**といった著名な成語句はゴシック体で強調されていて、巻末にはこれをもとにした**成句索引**があります。ただし日本人については掲載がありません。

●**『大漢和辞典巻 巻１～巻 13（修訂版）』（諸橋轍次著，大修館書店，1984 年）［R-8132-1～13］**は、漢和辞典ですが、漢字･漢語文化の一大百科と呼ばれ、熟語や名句を引くのによく使われます。親字約５万語のほか、漢語の熟語、故事成語、格言、詩文の成句、人名、地名など、収録している語彙は 50 万語にも及びます。引用文は唐の百科全書から戯曲まで多岐にわたる豊富な内容。たとえば七夕にも関わりが深い**「烏鵲」（うじゃく）**という言葉を**「烏」**の漢字から調べるとさまざまな漢詩が引用されています。この辞典を使いこなすためには**『「大漢和辞典」を読む』（紀田順一郎編，大修館書店，1986 年）［2-8132-キ］**が役立ちます。

＊＊　七夕によせて　＊＊

「七夕」を詠んだ詩歌も数多くあります。「織女・牽牛」の二星、「天漢（あまかわ）」をはじめ、女性が裁縫の上達を祈り月明かりのもと五本の色糸を針に通す「乞巧（きっこう）」の行事についても多く歌われています。また、中国では、七月七日の夜に牽牛と織女とが天の河で逢うとき、鵲（かささぎ）がその翼をひろげて橋をかけるといわれ、「烏鵲（うじゃく）の橋」として、これも七夕の詩のテーマのひとつになっています。ところで、旧暦の七月七日といえば、多くは立秋よりあと。古来の七夕は、星の隠れる梅雨時ではなく初秋だったのですね。

右の詩は、夭折の詩人林傑がわずか六歳で詠んだことで神童と呼ばれた名高い詩です。

七夕今宵看碧霄　しちせき　こんしょう　へきしょうをみる
牽牛織女河橋渡　けんぎゅう　しょくじょ　かきょうをわたる
家家乞巧望秋月　かか　きっこう　しゅうげつをのぞむ
穿尽紅糸幾万条　こうしをうがちつくすこと　いくまんじょう

参考文献：『唐詩歳時記』（植木久行著，講談社，1995 年）
［Ｇ－9214－ウ］